

「ハワイ大学マノア校英語研修参加報告書」

京都大学文学部2年 坂本 晃平

◆ハワイ大学マノア校英語研修について

ハワイ大学マノア校英語研修はハワイ大学マノア校の提供する NICE プログラム（三週間）に参加し、語学研修を受けるというものであった。授業は朝8時半から12時20分までオールイングリッシュで行われた。このプログラムは特にスピーキングに重点を置いているもので、常に「発信」が求められた。具体的には、ペアワーク・グループワークであるトピックについて話し合った後、クラス全体への発信、時事・社会問題をネタにしてディベート、アメリカ・ハワイの文化について調べてプレゼンをするというものであった。また、他の人の発表に対しても常にコメントを求められるので、夢うつつで聞いているわけにはいかず、常に英語で何をどの様に表現するかを常に考えていなければならない。実にクラスにいる間は否が応でも英語でものを考えなければならないのであった。これらが授業の大半を占めていたが、学校の教室を飛び出での OFF-CAMPUS EDUCATIONAL ACTIVITY なる授業もあった。私が所属していたクラスではダウンタウンとハールハーバに出かけていった。これももちろん語学研修の一環なので、ダウンタウン研修ではそれぞれが前もって調べていた観光名所のガイドをした。また、パールハーバーでは先生が英語によるガイドツアーをしてくれた。この体験を通して単に英語の運用能力だけではなくハワイ（アメリカ）の歴史・地勢・文化・経済などについても学ぶことができ、教養を高めることができたと感じている。また、マノア校の学生との一時間ほどの交流の時間が週に二回設けられていて、現地の大学生と交流する機会が与えられているのだが、彼らが日本の文化に非常に造詣が深いことに感心することしきりであった。彼らがこのように日本の文化に深い理解を示してくれたためにこの交流はとても楽しいものになったが、国際交流とはまず文化の理解から始まるのだろうということを強く実感した。

では、研修の成果はどのようなものだったか。これに関していえば、アカデミックな英語における流暢さというものを習得することがいかに難しいか、ということを実感することができた事が一番大きな成果と言っても過言ではない。実際、アイスブレイキングとしてクラスの頭に行われる「昨日授業のあとに何をしましたか？」というような他愛もないおしゃべりですらすらと話せたが、性差別をテーマにしたディベートでは、話しているうちに自分が何を言いたいかわからなくなり、同じことを繰り返したり、長いポーズが入ったりと、ボロボロであった。この体験を通して、アカデミックな議論を英語で行うためには、まず、多くの英語表現を知っていなければならないだけでなく、その分野に対する深い理解、さらには英語で考える能力が必要であるということを実感した。大学院に進学してさらに学問を深め、あわよくば研究者になろうと考えている自分にとって、こうした体験は世界的なレベルで渡り合うことの難しさを垣間見せてくれたと思う。とは言いながらも、授業中に自分の言いたいことを理解してもらおうとあがき表現することを通して、英語の運用力が向上したとも感じている。

◆ホームステイの経験について

ホストマザーが日本人の方だったために、家のルールも日本的（玄関で靴を脱ぐ）で、ホームステイで大きなカルチャーショックを受けることはなかった。大変親切に接してくれて、感謝している。しかし、二人の子どもたちにはとても驚かされた。分かりきっていることではあるが、7年半も英語を勉強していても4～5歳くらいの子どもよりはるかに英語が下手なのである。例えば、子どもたちが楽しんで観ているディズニーの映画では、セリフをところどころ拾っていくのがやっとなで、とても楽しんで観るという次元には達していなかった。また、いろいろと話しかけてくれたが、それを聞き取り、理解し、返事をするのは至難の業だった。言語習得の道は長し、と痛感させられた。